第 9 号　2003.11.1

आयुस: あーゆす

〈発行〉京都文教短期大学図書館／京都府宇治市槇島町千足80

秋に思う日本の古典

副館長・助教授　伊　藤　和　男

秋、それは物思う季節とも言えよう。秋を歌った平安、鎌倉の歌人達の歌の数々が思いおこされる。「春はただ花のひとへに咲くばかり、もののあはれは秋ぞまされる」と『拾遺和歌集』には歌われ、「もののあはれは秋こそまされ」と『徒然草』にある秋の到来である。季節の移り変わりに伴う様々な自然の美の競演に、繊細な日本人の精神が微妙に反応し、優雅な言葉の宴を生み出したのであろう。しかしそのような精神は今、時代のあまりにも早急な流れの中で過去のものとして忘れ去られようとしているのではないだろうか。ともすれば、利便性、効率性などの名のもとに、時代に迎合し、偏った商業主義に冒され、その結果人間精神の荒廃、文化の退廃があちこちで見うけられるのではないだろうか。

今我々は、長い歴史の中で今日に至るまでその価値を失うことなく存在し続けてきた日本の古典の数々を、この秋に思い、それらを味読することが必要なのではと感じられる。高校時代、「古典」の授業が好きであった私は、授業中に先生に当てられ、すぐれた歌物語として有名な『伊勢物語』第九段「東下り」を朗読した時、クラスの仲間が賞賛の拍手をしてくれたことをよく思い出す。「古典は声に出して読むことが大事なのだ」と言われた先生のことが懐かしく思われるのである。私には、古典の言葉の調子、響き、流れ、その中に感じとれる日本人の心が、読む者に、心の平安、静かなる世界を与えてくれるように思われる。

『徒然草』の第十三段に、「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。」とあるが、この「見ぬ世の人を友とする」という言葉が何よりも明確に、古典を愛する姿を物語っている。この世の生ける友は言うまでもなく大切であるが、人生をより深みのあるものにするためには、人間の想像力、人生を哲学する能力を最大限に働かせて、古典を友とすることも大切なのではないかと、常々思っている。

「折節のうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ。」と『徒然草』第十九段は語っているのであるが、物事に情趣を感じ取るこの「あはれ」の精神が今日忘れ去られ、人の心が荒廃しているように思われてならない。礼節を忘れた粗野な言動が、あたかも新しい時代の、新しい人間の姿であるとうそぶくかのごとき現代の日本社会の中で、世の喧噪に流されることなく、心静かに日本の古典を味読し、人生と世界を考え、少しでも深みのある精神の宴を、この秋に享受したいものである。「秋風にあへず散りぬるもみぢ葉の、ゆくへさだめぬ我ぞかなしき」（『古今和歌集』読人知らず）この歌などにも理性と感性の両方に訴えかける力を持った日本の古典の姿がうかがえて興味深い。こんなことが、秋の到来と共に、そこはかとなく思われるのである。

私の一生を左右した本との出会い

教授　村上俊男（生化学）

私がこの原稿を依頼されたときに、真っ先に思い浮かぶ一冊の本があった。それはDNAの構造を発見した科学者の記録と銘打たれた『二重らせん』※というタイトルの本である。私が大学3年生（化学科）の秋だと記憶しているが、来年の卒業研究を控え、どの分野（無機、有機、有機合成、高分子、物理化学など）にするかを思い悩んでいた頃であった。生物化学という授業を初めて受け、「まだまだ未知な分野で、将来君達でも新しい発見ができるかもしれない」という教授の言葉に心を動かされて、たまたま歯医者の待ち時間の暇つぶしに何か読もうと選んだのがこの本で、私のその後の人生を決定づけることになってしまった。

その内容は、今日ではヒトゲノム計画などで万人に周知されつつある遺伝子の本体DNAの立体構造を解明する科学者の先陣争いの記録である。著者は後に主役の一人になったワトソンで、彼の目から見た個人的記録という形をとっている。

アメリカ人のワトソンはタンパク質の三次元構造の共同研究でイギリスに渡るのだが、それは遺伝子の本体がタンパク質ではなくDNAであることが実験的に証明された時期で、生物学者である彼は徐々にDNAに魅せられていき、その後の研究を全てDNAの構造解明の糧にしていくのである。またそこには物理学者のクリックをはじめ様々な専門分野の若い科学者たちが加わって、それぞれの立場で純粋な気持ちからDNAの構造に関する意見を出し合って本質に迫っていき、図らずも科学者で既にノーベル賞受賞者のライナス・ポーリングとの先陣争いを繰り広げることになる。

やがてポーリングはタンパク質のα－ヘリックス構造の解明から、DNAのらせん構造、それも三本鎖構造へと成果をふくらませ論文発表へと先着していった。ワトソンら若手グループもらせん構造で三本鎖より二本鎖の可能性が高いところまでは進んでいたが、ポーリングが構造解明したとの報に「負けた」と落胆してしまう。つまり同じ新事実をつかんでも、先に論文にした方が評価され、後は二番煎じになってしまう世界なのである。

ところがポーリングの論文が三本鎖で、明らかに初歩的なミスを犯していることがわかると大いに活気づき、4種の塩基が多様性をもちつつも構造的には規則性を保つという難解な問題をクリアして、後にワトソン・クリックのモデルと称される「二重らせん構造」を発見するに至るのである。彼らはその業績で1962年にノーベル賞に輝いた。

この本の本筋は以上のようであるが、このような偉業を成し遂げた彼らは寝食を惜しんで一丸となって研究に没頭していたかといえばそうではなかった。研究者同士の行き違いもあり、女の子とのパーティに心を奪われたりもして、普通の若者の人間的な部分をもちつつ、最後のクライマックスでは連鎖反応的に集中力を発揮して大御所に勝利したという点が、共感を覚えたところである。

こうして大学4年の卒業研究で生物化学研究室に入ってからは博士課程まで進み、その後医学部で3年ほど研究を重ねた後、本学へ赴任してきた。その間、微生物にアルコールを食べさせて有機酸を作らせることに成功し、ビタミンB_2の新しい誘導体の構造決定もできた。医学部ではヒトの赤血球中に未知のタンパク質分解酵素を発見する幸運にも恵まれた。まさに冒頭での恩師の言葉にあったように、私でも生化学の未知部分の扉を少し開けることができたといえよう。

毎年食物栄養Ⅰ回生の生化学の講義で、この内容（核酸とタンパク質生合成）にふれるときにはついつい力が入ってしまい、学生に「熱く語っていましたね」と冷やかされる始末である。いまはテレビやインターネットなどを通して、簡単にこぢんまりとまとまった知識や情報が手に入る時代であるが、そのことで満足してもらいたくはない。秋の夜長にじっくりと長編本に挑戦し、これからの人生に影響を与えるような感動を実感してもらいたいと、私の経験から切望するしだいである。

※『二重らせん：DNAの構造を発見した科学者の記録』ジェームス・D．ワトソン著；江上不二夫，中村桂子訳　タイムライフブックス

私のすすめる3冊

専任講師　岡　本　美　晴

1　『えをかく』　谷川俊太郎／作　長新太／絵　講談社

娘が保育園に通っていた頃、毎晩何度も何度も読まされた。自然と生活それら現象と行為が淡々と続く。難解なところもあるのだけれど、子どもはじっと耳を澄まし、目を凝らして聞いていた。長新太さんの絵と共に、大人のなかにまだ子どもの部分を大事においている人々には、この削ぎ落とされた言葉の表現の魅力が、ある種のリズムを伴って心に染みてくるのではないだろうか。

2　『表札など：石垣りん詩集』　石垣りん／詩　童話屋

学生の頃、詩は身近だった。中原中也に始まって、萩原朔太郎の「月に吠える」や「緑色の笛」は絵を描く題材になった。今、茨木のり子さんの「言の葉」は1970年から1990年以降まで作者の年代を追っているのだが、スーッと作品に近づける年代があっておもしろく思う。「表札など」は、ほんとうにやさしい言葉と表現の確かさで、シャンと背筋の伸びた、高い志を感じる。

3　『テロの帝国アメリカ：海賊と帝王』　N・チョムスキー／著　明石書店

著者ノーム・チョムスキーについては、詩の解説文などでその名前を目にする程の知識しかなかった。言語学者として業績を高く評価される一方、アメリカの外交政策を批判する活動を続けている。その講演と会見の映画に心を動かされて、本書に行き当たった。事実とそれに基く分析と、研究者の姿勢を横に見ながら、世界の情勢を勉強する機会を得ることができた。

一四六　ソネット

ああ　燃える美徳に飾られた　貴くも
熱い魂よ　そなたに捧げた数多の草稿
そなたこそ　今やかけがえのない気品の完き宿
気高い勇気の上に築いた堅固なる塔、

ああ　生けるひとひらの雪の中の焔よ
快く散る花薔薇よ　生ける白雪がわが心を映し浄めるよ
ああその歓び　わが翼は歓喜のままに天駆ける、
陽光の照り映える下　誰よりも眩い美貌の許へ。

わが詩歌が　遥かなる地にも知られるならば　君の名が
トゥーレの島や　バクトロス　ドン　ナイルの大河に
アトラス　オリュンポス　カルペスの山々に響くものを。

この世界の四大州に　もし伝えられねば
せめては聴かせよう　この美しい国に
アペニン分かち　海とアルプスの囲む美し国に。

『ペトラルカ　カンツォニエーレ』池田　廉　訳　ペトラルカ（名古屋大学出版会）

※　この詩は、イタリアルネサンス期の詩人、フランチェスコ・ペトラルカ（一三〇四～一三七四）の詩集『カンツォニエーレ　―俗事詩片―』の第一四六歌として収められています。

「とうきちと七右衛門」

生活文化専攻２回生　北　田　　維

主人公、とうきち。農民の子に生まれ、去年両親が死んでからは一人で暮らしている。財産らしいものは牛一頭だけ。贅沢することもなく、静かに暮らす。むごいものを見るのは我慢ならない質。

藪内七右衛門。武士であり、数千人の家来を率いる。愛刀は同田貫正国、九尺五寸。情愛が人一倍強く、家来にも慕われている。

この二人の男はまったく異なっている。職業も価値観も、生き方そのものが。生きるために命を育てる者と、生きるために命を奪う者。対極に位置する二人である。どちらの生き方がいいだろうか。とうきちの生き方は理想にも思える。必要以上に相手を傷つけることもなく、周りから見て「安全圏」の人間。とうきちにとっても、周りは周りでありそれ以上でも以下でもない。それゆえに自分が手酷く傷つけられることもない。無難に人間関係をこなしていけるだろう。こういう人間を「善人」と呼ぶのかもしれない。逆に七右衛門はそうはいかない。武士は相手を殺さなくてはいけないし、殺さなければ自分が殺される。自分の家来も当然死ぬ。家来を大事に思っていればいるほど、失ったときの喪失感は大きい。殺した相手に恨みを抱くのも止めようがない。恨みは簡単に、理性や「いい感情」とされるものを吹き飛ばす。その結果、また多くの命が死ぬのかもしれない。では、七右衛門は「悪人」だろうか。直接、間接の違いこそあれ、彼のおかげで人が死んだのだからやっぱり悪人かもしれない。しかし、彼が家来に慕われていたのも事実である。現に彼は情愛が人一倍強いと書いてある。その人間は悪人か。もし違うなら悪いのは何か。七右衛門が情愛だけを持ち、恨みさえ抱かなければ死ななくていい命もあったはずだ。では、「恨み」という感情そのものが悪いのか。そういう見方もあるだろうし、昔から人は恨みなど抱かぬように努力してきた。しかし、これほど難しいことはない。恨みはそれ単独だけで存在しているわけではない。情愛と根っこは繋がっているのである。片方が強くなればもう片方も同じこと。片方が弱くなれば片方も同じこと。七右衛門はどちらも強かった。とうきちはどちらも弱い人間に思える。とうきちが名前で呼びかけられる場面は一度しかない。人が相手の名前を呼ぶとき、必ず相手だけに向けられた呼び手の思いが込められている。それが最後の場面までとうきちにはない。とうきちの生き方は理想だが、少し寂しいかもしれない。かといって七右衛門の生き方が幸せかと聞かれたら難しい。ただ、いつどの時点であれ、どちらかの生き方を選ぶことも、それに近い生き方を選ぶことも可能である。なぜなら、とうきちも七右衛門も本当のところ根っこは繋がっているのだから。

梨木香歩／作　木内達朗／絵：『蟹塚縁起』（理論社）